

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進校 実施報告書

【都道府県】 福岡県

【学校名】 うきは市立山春小学校

【テーマ】 I II III IV V

- I オリンピズムの教育的価値
- II おもてなし精神とボランティア
- III パラリンピックと障害者スポーツ
- IV 日本文化と異文化・国際理解
- V スポーツを楽しむ心

【実践研究タイトル】

「運動好きを育てる」教育活動

【実施学年、部、講座等】

第4学年（男子11名・女子12名）

第5学年（男子11名・女子9名）

第6学年（男子13名・女子12名）

【目的・ねらい】

自分の目標を持ち、壁に挑戦し、成功体験を繰り返しながら、克服、達成、競争の楽しさを味わい、運動好きを育てる。

【種類】(当てはまるものに○)

- 各教科(体育科) ・道徳 ・外国語活動 ・総合的な学習の時間 ・特別活動
 ・教科以外での取組(業間活動)

【実践内容等】

第5学年 体育科学習指導 単元「跳び箱運動」(8時間)

～ 「山春オリンピック」 第5学年 跳び箱運動 ～

1 目標

- 仲間と協力して目指す技に挑戦し、「山春オリンピック」を成功させようとする。
- 技を分析的にとらえ、動きの高まりを仲間と評価し合う。
- < 個の技 > 安定した開脚跳びができる。
 < 集団の技 > 仲間とタイミングを合わせたシンクロ開脚跳びができる。

2 計画(8時間)

目標設定、見直し	< 個の技 > 「安定した開脚跳び」を高める ○切り返しの動き ○一連のスムーズな動き ○力強い踏み切り ○静止した着地 ※毎時間の自己目標の設定 ※練習の場の選択	山春オリンピック開催
	< 集団の技 > 「シンクロ跳び箱」を高める。 ○助走～着地までのタイミング ※個々の技と相手のタイミングを合わせた助走距離、速さ	

1時間目 8時間目

3 指導の実際

<目標設定、見通し>の活動



オリンピックに関する資料をもとに単元の見通しをもつ

単元の導入において、オリンピック、五輪マークを見せながら、2016年には「リオオリンピック」が開催されること、2020年には、日本で「東京オリンピック」が開催されることを話し、関心を持たせた。また、体操競技の内村航平選手の写真を見せ、

- 跳び箱運動は、体操競技につながっていること
- 跳び箱運動の楽しさは、できない技ができるようになる楽しさ、難しい技に挑戦する楽しさ、そして、美しく表現する楽しさがあること
- 美しさは、動きの滑らかさや姿勢の美しさが大切であること
- 「山春オリンピック」を開催し、技を披露し合うこと

といったことを伝え、跳び箱運動の学習への構えをつくり、見通しを持たせた。

そして、「美しい開脚跳び」（安定した開脚跳び）を<個の技>として、「シンクロ（2～4人での開脚跳び）」を<集団の技>としてつくり上げ、「山春オリンピック」で演技することを伝え、モデルの提示を行った。その後、前学年までに学習した跳び箱運動の技を繰り返し試しながら、自分ができる技、できない技を確かめた。



試しの跳び箱運動

<「安定した開脚跳び」を高める>活動

- 「切り返し」の動きを身に付ける

子どもたちにとって、開脚跳びで難しいのは、「切り返し」の動きであった。「切り返し」の動きを習得させるために、倒立からの突き放しや跳び箱に着手して腕を突っぱねる動き（いわゆる失敗して

子どもたちは、オリンピックや有名な内村選手の写真を見ながら、「自分も、内村選手のように、美しい開脚跳びを山春オリンピックでやりたい。」と、単元全体の目標と見通しを持った。また、本単元のポイントとなる「切り返し」の動きを強調したモデル提示を見て、「空中動作を大きくして、腰を高く上げることが大切であること」を確かめていった。

尻もちをつく)、壁押し等の練習をして、切り返す感覚を身に付けさせた。

○一連の動きを高める

また、空中動作をダイナミックに美しく演技することができるように、セーフティーマットにダイビングする練習、ロイター板を徐々に離していく練習を行わせた。

一連の動きが、ある程度できるようになった段階で、仲間との相互評価を行った。評価する子どもが、3～1の札をもち、試技をした子どもに得点を示す。そして、「着地がピタッと決まっていた。」や「腰の高さが足りなかった。」というように動きのよさや不十分さを伝えた。

切り返しの動き、踏み切りの力強さが高まった子どもの中には、「抱え込み跳び」ができるようになった子どももいた。切り返しと踏み切りの動きの高まりにより、腰を高く上げた着手ができるようになったためである。



倒立からの突き放しの練習



得点板による相互評価の様子



得点板による相互評価の様子②



抱え込み跳びを行う児童

<シンクロ開脚跳びを高める>活動



シンクロ跳びの練習をする様子

この写真は、集団の技である、「シンクロ開脚跳び」の練習をする子どもたちである。ペアでの練習から4人のグループ演技を行う。個々の跳び箱の高さ、助走距離等が違うため、助走のスピードや開始するタイミングを合わせる練習を行った。「せーの！」のかけ声をかけたり相手の動きを意識したりしながらシンクロさせていった。

「フー、ピタ3秒」ができるようになろう。

【めあての達成度:100点中】 自分の目標をもつことができた。
 (100)点 A B C D

<学習の振り返り> 練習の場を選んでできた。
 A B C D

仲間と教え合った。
 A B C D

自分に自信をもつことができた。
 A B C D

【次の目標】 山春オリンピックに向けて3秒止まるができるようになる

左の資料は、子どもの自己評価ノートの記述である。めあての達成度、振り返り、自分の次時の目標を毎時間記入し、自分の学びを積み重ねている。

資料の子どもは、着地での3秒静止について、友達にアドバイスすることができたことの満足感と、次時の目標について「山春オリンピックに向けて・・・。」と期待感をもっていることが分かる。

学習の振り返りと次時の目標

これは、毎時間、共通のめあてとともに、自分が課題としていることを「次の目標」として明確にさせたことが要因であると考えられる。

<山春オリンピック>の活動



開会式（オリンピック会長挨拶：左、選手宣誓：右）の様子

上の写真は、「山春オリンピック～第5学年 跳び箱運動」開会式の様子である。行進曲を流しながら、入場行進を行った。学校長が、山春オリンピック会長に扮し開会式で会長挨拶、そして代表児童が、選手宣誓を行った。

これまでの体育科学習では、あまりなかった正式な大会形式で、子どもたちの顔も緊張していた。少なからずオリンピックの雰囲気を楽しんでいた。



個人技の演技（かかえ込み跳び）



集団シンクロ跳び箱の演技

前ページの写真は、個人技及び集団による演技の様子である。これまでの練習を通して、動きを高めた児童は、高い跳び箱を使った抱え込み跳びを披露した。また、集団でタイミングを合わせて美しさを見せるシンクロ跳び箱では、4人がかけ声をかけながらきれいな演技を披露していた。



得点を出す審査員役児童

左の写真は、審査員をしている子どもの様子である。仲間の演技に対し、「3点!」、「おいしい! 2点!」など、審査をしていた。演技をする子ども、演技を見る子どもも「山春オリンピック」本番を楽しむ様子が見られた。

学習終了後も、「集団シンクロは、どのチームが優勝するかな?」「今日は、これまでで一番よかった!」と、山春オリンピックを楽しんだ感想が出されていた。

このように、入場行進、開会式からスタートし、審査員役の子どもが見守る中、演技をさせるというように学習活動の展開自体を「オリンピック」にすることで、「スポーツをする、みる、支える」楽しさも若干ではあるが味わうことができたと考える。

(実践上の工夫点、留意点等)

- ・単元を通して「山春オリンピック」として位置付け、子どもに明確な目的意識を持たせたこと。
- ・集団跳び箱を教材として、仲間とのかかわりを深めさせたこと。

(成果)

○ 本実践前後の子どもの意識の変容について、「跳び箱運動は好きですか?」の問いに対し、

	好き	嫌い
実践前	8人	12人
実践後	16人	4人

という結果であった。好きな(好きになった)理由としては、

- ・ 動きのコツが分かって、できるようになったから。
- ・ 友達と動きを合わせる「シンクロ跳び箱」が、楽しかったから。
- ・ 本物のオリンピックみたいに、開会式や審判があつて、ワクワクしたから。

といった、運動の仕方に関するものであった。

しかし、4人については、実践後も跳び箱運動が嫌い、と答えている。「動きが上達しない」、「難しい技に挑戦したいけど、怖い。」という理由からである。個々の能力に応じた課題の設定、楽しさを体験することができる教材の開発が課題である。

以下は、本実践後の子どもの感想である。

- ・ 山春オリンピックに向けてがんばったおかげで、目標に向かって挑戦できる気持ちが芽生えた。
- ・ これまでは跳び箱はいやだったけど、みんなの応援で僕は跳び箱が二番目に好きになりました。
- ・ 校長先生も来られて、応援してくれたので、僕は必死にがんばりました。
- ・ 「いよいよ山春オリンピックだ。今まで習った跳び箱の跳び方を今日生かしたい。」と、思つての

これらの感想から分かるように、仲間や大人の関わりの中で、運動に対する楽しさを、さらに広げていったことがうかがえる。

【オリンピック・パラリンピック教育の実施に伴う課題点】

- 体育科を中心として、特別活動、総合的な学習の時間とどのように関連をはかっていくかを明らかにしていく必要がある。
- 学校全体でオリンピック・パラリンピック教育を進めていくための、本事業の内容、方法等を全職員で共通理解して共有していくことが大切である。